

電脳網千句第八 賦何垣連歌百韻

自二〇一八・一・七 至二〇一九・一・一五

於 さいばあすぺいす

一折表

梅開くいまひとたびを連ね歌

千草

春告鳥の初音きく頃

如月

あさぼらけ霞む薨の波みえて

樂歳

足の向くままたどる坂道

遊香

おのづから謡ひいでたる杜若

夢梯

ひんがしの空うちながめつつ

蘭舎

月よみの大臣静かにうなだれて

梢風

あたゝめ酒を振舞ひにけり

羽衣

一折裏

かげろふを見つめ盃さしいだし

路花

訪ふものはただ秋の風

朝姫

もののふの夢のあとなる関の扉に

月

うみは鏡のごとくかがやく

草

いさぎよく船出のときと告げたきを

香

妃と誇り奪ひかへさむ

歳

いたはしや千と一つの夜を泣きて

舎

枕にこめし思ひさまさま

様

襲たる花のくれなる綻ぶも

衣

筆持つ庭にあは雪ぞふる

風

深山へと蝶の誘ふ道ゆかば

姫

ふと懐かしき鄙歌の節

花

潮千珠潮満珠の月涼し

草

泥絵ゆらして宵宮の灯の

月

二折表

おどろおどろ陸奥のねふたの浮かび出で

歳

などで真直に狐花生ふ

香

人住まぬ家に佇めば鶉なく

様

野分のあとのひとすぢの雲

舎

かははらに流れしものを見てるたり

風

ただ朽ちぬるも定めなるらむ

衣

されどわが胸に寄りくる子のありて

花

まなこの映す小さきまことに

姫

星屑の陸に墜ちつつ空を恋ひ

月

はるけくしのぶ隼の旅

草

山守の足どり残す霜の道

香

薪あたまになに語り行く

歳

月の舟ほのかに傾ぐ夕まぐれ

舎

萩のささやく野は末枯れて

様

二折裏

つまもまた衣うつ音きくならん

衣

旅にあらねど旅のこころを

風

棹さしてうつせみの世を渡りゆく

姫

ときに早瀬の浮きつ沈みつ

歳

言の葉のことなる端のおもしろく

草

かぎろふ辺り馬を追ひつつ

月

思ふどち永きひと日を遊び和ぐ

様

馴染し里に花の舞ひ初め

舎

旗の音混じりて風のおぼろなる

風

御しるしなきもとぶらひて候

衣

僧ひとり荒野の冬の月の道

歳

打ち棄てし名の口惜しき夜

姫

白湯そそぐ器に深き藍のいろ

香

まつさととあるしもうさの邑

草

三折表

真間の井に汲めるをとめご嬬やかに

月

木下園にますらをの待つ

梯

みやまぢは雨にやならむ風のいろ

舎

鳴きながらゆくからす三つ四つ

風

神垣に祝詞あがればつゝがなく

衣

祠に初穂奉る秋

歳

葛紅葉人は知らねど色映えて

姫

何処へ止まるやとんぼうの翅

香

いつのまに涙にむせぶまむまろき月

草

仄かに揺れて詩となるらむ

月

浜風に塩やく煙たなびきて

梯

日暮近づき暮るこひしさ

舎

世にあらば幾年のちの逢瀬あれ

風

折り目正しく結ぶ玉梓

衣

三折裏

防人は霞める空を仰ぎ見て

ふる里思ひ春の野に立つ

あふれ咲く花の枝より鳥の声

つばいもちひの届くうららか

朝市に積まれし絵皿いとゆかし

目閉ぢ目を開け居眠れる猫

前うしろ山あるむらの冬ごもり

帰らざるもの雪のながめに

うつくしきひと夜の月の物語

君待つ宿に萩は乱れて

文を書く手をとめて聞く虫の声

吊るし柿にも艶のありしや

閼伽桶に汲み入れし水さらさらと

御佛の顔あふぐ目出度さ

歳

姫

香

草

月

様

舎

風

衣

歳

姫

香

草

月

四折表

古き壺ひとつ握りあて抱きゆく

梯

野には朝陽の静やかに射し

舎

くたかけの声の力をうれしども

風

筆にこめたるたましひのいろ

衣

海越えて流さるる今日濃き愁ひ

歳

ゆるさぬことをゆるされてをり

姫

冬枯れの枝を手折りて火にくぶる

香

毛衣を縫ふ刀自が鄙歌

草

山がつの垣訪ふものは風ばかり

月

季の移ろひ空に問ひかけ

梯

井に汲める若水に月鎮もりて

舎

春の一字を掛けしやはらぎ

風

あはれにもをかしき種を蒔くこゝろ

衣

熊野鳥の鳴かぬ日はなし

歳

四折裏

ぜえぜえと荒るる喉を宥めつつ

遠く聞こゆる鮎売りの声

静けさのきはみの底の忘れ河

伏せし想ひのときにせきあげ

ながらへし者こそあはれ徒野に

すゞろに綴る方丈の日記

璞の言葉を磨く花の朝

ひかり放ちてのぼる若鮎

姫

香

草

月

梯

舎

風

衣